

○投稿主旨

浅間神社社殿の再建時期について、堀切家古文書から手掛かりを得ていたが、今回、棟札の情報、副次的に碑文の情報を博物館から得たので、検討しました。これに関し、醤油醸造の浅見家（紙平）の関わりについても調べました。これら概要を連絡の窓にて、ご報告します。皆さまのご意見等をいただければ幸いです。

（今回レポートは、佐藤調査状況を田村副理事長・事務局岡理事に事前にお伝えした所、連絡の窓への投稿依頼あったものです。）

1. 浅間神社の再建時期

【明治20年12月20日上棟】、2/12博物館北澤次長より、神社棟札のPC画面の画像を確認。

2. Wikipedia内容と浅見家看板内容の信憑性

(1) Wikipediaの説明(参考) → [Wikipedia「浅間神社\(流山市\)」](#)

概要

流山市中心部、平地上に鎮座する。醤油醸造の浅見家の初代当主によって浅見家の鬼門と裏鬼門にそれぞれ浅間神社と箭弓稻荷神社を据え、初代逝去の1年前の正保元年(1644年)に創建。浅間神社が浅見本家の方向を向き、箭弓稻荷神社と対になっているのはその為である。享保元年(1716年)、庚申塚が築かれ、この頃から町内の社となっていた。当初、浅間神社と箭弓稻荷神社は小規模の祠だったと考えられ、安政4年8月25日(1856年9月23日)の台風によって倒壊、その後、5代目当主・浅見平兵衛萬蔵(浅見家10代目)が再建したと、本殿左側の石碑に刻まれている。また、萬蔵は、明治19年(1886年)から明治22年(1889年)に富士山の溶岩の運搬を岡庭船運業に依頼し、富士山の溶岩で富士塚を造成し社屋の再建をして現在のかたちとなっている。

(* 安政4年とある説明文は、安政3年の誤り)

浅見初代は江戸初期、利根川東遷工事完成頃の寛永年間（1632年頃）に、秩父から移住し5代目まで製紙業を営み、以降現在まで、紙平という屋号が使われている。初代は、鬼門に浅間神社、裏鬼門に出身地である秩父東松山の箭弓稻荷神社を建立した。また、当初、敷地北側にあった紙平山という屋敷基地を流山寺に移し、菩提寺とし、流山寺の天台宗から曹洞宗への改宗に関わった。宝暦年間（1750年頃）に銚子からの縁で、製紙業から醤油醸造に転じ、6代目の初代浅見平兵衛から六代平兵衛まで名跡・平兵衛を継承し商標登録は、亀甲益益、亀甲鶴を使用した。天保年間（1840年頃）には当家に奉公に入った野田の茂木家に、亀甲標を暖簾分けしている。当時流山根郷には、この銅板画の様に東西100m南北100mの大きな醤油工場があり、江戸川の水運を使って江戸に醤油を出荷しており、白みりんが開発される50年前から麹菌による醸造の技術・文化が存在していた。紙平は江戸後期から明治の浅見平兵衛萬蔵時代に最も盛況し、浅間神社に富士塚及び成田不動尊の建立、流山郵便局、流山小学校設立にも寄与したが、大正に入ると戦禍で醤油醸造も困難となり、戦後の農地解放・財閥解体で廃業した。石碑上部の鬼瓦は、井の印があることから、5代目浅見伊助の頃・宝暦年間（1750年頃）に建てられた蔵に使われたと考えられ、この赤櫓の柱は、この蔵に使われていた梁の一部である。

記 浅見本家15代目 七代浅見平兵衛順一

「看板文」

(2) 浅見家看板内容の概要(参考)

2023年1月本町通り浅見家所有マンション前に浅見家にて設置の看板内容は、前(1)Wikipediの説明の外、以下の説明。

・浅見家の出自、製紙業から醤油醸造への転業、近世後期・近代の商売状況、商標登録、看板脇に設置の銅版画や蔵の梁などの説明

(3) 堀切家文書の中にある「至誠講規定簿」の内容概要

「至誠講規定簿」明治6(1873)年、堀切家文書。2022.8キョーマンセミナー資料。

浅間神社風災による再建講の計画(至誠講規定簿)

正保元(1644)年建立と伝えられる浅間神社は、安政3(1856)年の風災により社殿が吹き潰され、仮の社殿に祭神を祀ったままなので、神社再建費用の集金方法についての取り決めが記されている。「堀切紋次郎や秋元三左衛門などが世話役となって至誠講と名付けた講を組織し、当月(2月)から130か月をかけて、総計金3,000円を積み立て、浅間神社を再建しようとするもの。

(4) 至誠碑に彫られた内容概要

2/12博物館北澤次長に、社殿左にあるという神社再建碑位置と碑文情報入手。風化による劣化で現在は判読不可との事。



「至誠碑」 社殿左手前の碑



この浅間神社は去る安政三年八月の嵐により、損なわれたことより、ただ仮宮のままにて年を経ていたが、天皇治政の明治の世となり、明治六年、中村権次郎、浅見喜兵エの、二人の中心人物を始めとして、まことに信心深き人々が、「至誠講」と名付けた講を結び、十年の間、きちんと、積立金の管理に努めたことより、ついに去年の冬から、御社の造営を始めた。
こうして村人たちすべてのものがよく務め働くなかで、浅見兵助、武村八重郎などが導き周囲の者を力強く指導し、目的を速やかに達したので、講を開始した頃よりも、感激が大きい。
狂わしいほど培えるのはもとより天照大神のおかげであることはいまでもない。
なお、この人々の深い心づくしによらなければ、どうなっていたことだろうかと思ふと神司（神管）の口も喜びあふれ、碑文を彫り、後世に遠く伝えようと、語るのを聞きし、大変に喜ばしい。

明治十九年六月一日大教正本居靈印
志るし御久

篆額至誠碑の三字は
正六位勲五等岩佐為春君の書なり

* 語訳 佐藤の屈訳、田村（哲）さん、
岡さんにて添削

博物館金石文調査票「至誠碑」文の読み下し
明治六年に社屋再建の費用を「至誠講」を組んで
資金調達を開始、世話役の中村権次郎や浅見喜兵
二等が中心に尽力。十年を経るなかで、浅見兵助、
武村八重郎などが周囲の者を指導し、目的を速や
かに達した。

- ・「至誠講規定簿」は、計画
 - ・「至誠碑」は、完成の記念碑
- 両方の内容は同じ

3. 結論(佐藤(茂)見解)

(1)再建時期 棟札により、【明治20年12月20日上棟】である。

「至誠碑」の読み下し

4. その他推定 「至誠講規定簿」と「至誠碑」からの推定。

①明治6年2月浅間神社再建計画が立案され、積立金の講(至誠講)が発足した。

至誠講規定簿に載っている世話人が中心となって講を推進した。

講元	浅間社	
世話役	清水九兵衛	* (三河屋?)
	浅見平兵衛	* (紙屋平兵衛、醤油醸造販売)
	中村権次郎	* (中権、五世権次郎 重年)
	浅見喜兵衛	* (紙屋喜兵衛、醤油醸造販売)
	堀切紋次郎	* (五代紋次郎 儀助),
	高橋正衛門	* (不明?)
	秋元三左衛門	* (八世三左衛門 房尚)

②明治19年に再建工事開始

この時期に「至誠碑」も記念として建立。

③明治20年12月に社殿の棟上式

④再建に浅見家の大きな協力があったのは間違いないが、町内の講による積立金が原資となっていることから、浅見家が建てたのではなく、町内全体で建てたと考えるのが妥当。

5. 不明点・疑問点

(1) 仮社であった期間は約30年間。この間どんな建物だったのか？再建決定迄や講の期間にかなり要している。

明治初期、流山が行政・司法・教育等や商工業の中心となっていた時期や根郷の鎮守であること考えると、あばら家同然の社ではなく、かなり補強され手当された建物だったのではないか？

又、幕末、新政府軍の来流時、ここに錦の御旗を立てたとすれば、それなりの仮社であったのではないか？

・再建計画まで20年も要したのはなぜか？(まちに資力がなかったか。浅見の氏神的であったからか)

・資金計画に130か月も要したのはなぜか？)。まちに資力がなかったか。個人的なスポンサーに頼るのではなく町全体で再建しようとしたからなのか。浅見家から根郷の鎮守へ？)

(2) 浅間大神の石碑建立と、神社再建時期は、ほぼ重なるが、浅間大神碑なども、至誠講の予算内で造られた可能性もあるのではないか？浅間大神碑の事は、至誠碑に何も書かれていない。神社造営時や完成時に富士塚建設の計画はあったのか、別の計画であったのか？

(3) 浅間神社の創設者は、浅見家当主であると看板やWikipediaに記述あることも、浅見家の言い伝えと考えれば良いか？

(4) 祭神について、浅間大神の碑からこの時点での祭神は浅間大神と認識していたからかではない？。木花開耶姫命は神社明細帳への登録上の祭神であったのではないか。

6. 前3, 4, 5, について、皆さまからのご見解や、ご意見等を、お願い致します。

* 参考 安政3(1856)年の風災について、流山の風災記録について

①市史研究No24に博物館上條学芸員のレポート有り。熊野神社の別当寺(薬師院)の樹木倒壊等の記録あるが、各社寺の被害詳細は不明、としている。

②柏市史(8月25日年表)の記述、大風雨、家屋の倒壊多く被害甚大。根戸村等各村の被害の記述、本多領中相馬21ヶ村の被害、居宅全壊287軒、半壊168軒、家屋流失1軒、死者8人。流作場冠水し稲流れるとある。これらに流山の中相馬領4村が含まれているかは不明。